



正月、伏羲河村の中ほどにある崩れた塬の下で、おじいさん達と若者が円陣に座り、陽を浴びてカルタをしており、何人かの女の子が小鳥のようにチーチーピーピー周りを囲んで遊んでいました。その中に上から下まで赤い服を着た女の子がいました。真っ黒いつやつやした髪の毛が顔の周りを蔽い、笑うとウサギのような歯がみえてとても可愛いのです。私が遠くから見つめると彼女も藍色の帽子を手に私を見えています。

一年半後の2001年8月、私は写真を手にこの女の子に会いたいと伏羲河村にやって来、女の子の家を探し当てました。女の子の両親はとても暖かくもてなしてくれ、水やタバコを勧めてくれたりしました。父親は写真を見るや首に玉飾りを掛けた女の子を呼び、オンドルの上で私のためにアンケートを書かせたあと、写真を取って又しげしげとしばらく眺めると、突然気がついたように言いました。

「写真の子はこの子じゃない、お姉ちゃんの方だ。」そう言いながら、オンドルの上にずうっと座ってひと言も話さなかったやや大きい女の子を指しました。

私も仔細に見てみると確かに「ウサギの歯ちゃん」はこの女の子です。彼女はずうっと傍に座って、羨むような眼差しで妹の一挙一動を見ていましたが、私がアンケートを頼むと嬉しそうに、オンドルに腹ばいになって一生懸命にアンケートに書き込んでくれました。

父親によれば、大きい子は文瑛といい、小さい子は文文とのこと。私は彼女達を部屋の外に出てもらって何枚かの写真を撮りました。妹の文文を撮影する時、お姉さんの文瑛はおとなしく傍で立っているのですが、文瑛を撮影しようとする時、文文はお姉さんの傍を離れず、しばしば頭を(カメラの前に)突き出して、横にした頭がカメラの中に入ったりしました。

その後、伏羲河村に来る都度この姉妹の写真を撮っていましたが、そのうち、二人の傍らに彼女たちに



文瑛と文文

とてもよく似た、もっと小さな女の子の姿があるのに気が付きました。訊いて見ると2人の妹とのことでした。又、年齢がやや大きな女の子に一度偶然出会い、その後、何度も見かけるようになったその子は、2人のお姉さんで、郷の学校に行っているのだと知りました。

私はこの四姉妹を並べて写真を撮りました。村の人の話では、実はこの家ではこの四人にとどまらずその後も女の子が生まれ、ほかにも人にあげた子がいるとのことでした。

両親はきっと人には言えない辛さを味わっているでしょう。陝北のこのあたりではどの家も男の子が生まれなければ、肩身が狭いということもありますが、一番大切なことは年老いたとき頼れるものがいず面倒を見てくれる人がいないということなのです。(田井訳)



文瑛と一番下の妹